



| | |
|--------------|---|
| Title | 「文藝雑誌」：文士の起業 |
| Author(s) | 吉岡, 真緒 |
| Citation | 太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 43-46 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/97696 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『晩年』生成とメディア

「文藝雑誌」

——文士の起業

吉 真 緒 岡

一九三六年一月一日～同年五月一日。全五冊。月刊雑誌。砂子屋書房刊。書房主の山崎剛平はじめ編集人まで、当時氣鋭の文士であった。編集担当は浅見淵。毎号、口絵と真に数名の作家の近影、扉写真に作家の原稿や書簡を掲げ、創作、小特集、読者の投稿による「新人文芸」欄等を主な柱として組まれた。巻末には「読者通信」欄が、裏表紙には期限付き「投稿券」が載せられた。

発行元の砂子屋書房は『晩年』の発行元でもある。早稲田の同級生だった書房主山崎に「出版プランは一任する」と言われて前年十月の創業に参加した浅見は、金融恐慌、世界恐慌による大不況の余波で新人作家の作品集などがほとんど出版されていなかつた状況に目を付け、「まだ作品集を持たぬ新作家たちの第一創作集を出す」という企画を立てたという。これが、外村繁『鶴の物語』（一九三六・一）仲町貞子『梅の花』（一九三六・六）、太宰治『晩年』（一九三六・六）、和田傳『平野の人々』（一九三六・八）、尾崎一雄『暢氣眼鏡』（一九三七・四）による「第一創作集」叢書であった。当時浅見は、太宰の前衛的な作風に惹かれてはいたが、企画頭初に執筆陣として選んだのは外村、仲町、尾崎のみであった。しかし結局、檀一雄の熱心な売り込みによって太宰が、そして吉江喬松の強力な推挽で和田が、共に尾崎の前に割り込む形になつた。叢書はすらりと上梓されたわけではない。最初に刊行された『鶴の物語』は、所収の「血と血」が切り取りを命ぜられた。本になつた頃に勃発した一・二六事件の影響で検閲が厳しさを増したためである。切り取り跡の生々しい本の売れ行きは抄抄しくなく、そのうえ事件の影響で山崎が投資していった株が大暴落し、一時書房は経営危機に陥つた。『晩年』の刊行が六月にもつれ込んだのはこのあたりである。『晩年』は初版五〇〇部が半分しか売れなかつた。書房側の評価が高かつた仲町の本も、山崎が豪華な本にしてしまつたため定価が高くなり、思つたほどには売れなかつた。書房が立ち直つたのは、廃業を決めて出した『暢氣眼鏡』が第五回芥川賞を獲得して売り切れ、増版を定価一円の普及本に切り替えての大当たりに至つたためであつた（浅見淵『昭和文壇側面史』一九六八・二、講談社）。書房の危機が、太宰には処女創作集刊行を運命の六月にし、尾崎には芥川賞を獲得させたといえよ（経済的には失敗だつたようだが、有望な新人を世に送り出した「第一創作集」叢書の功績は大きい）。そしてこの線上に「文藝雑誌」があつたことは、創刊号の「編輯後記」に明らかである。

純文学復興の氣運旺くなる折柄、文藝雑誌は、文壇に新生面を吹込まんとして生まれ出でたるものである。即ち、毎号、氣鋭の新進作家を中心にして、有望なる新人の原稿を集め、常に誌面に新鮮な空氣を漂はし、文壇にその空氣を送らんとしてゐるのである。

同時に、一方文藝雑誌賞を懸けて、広く野に遺賢を求め、隠れたる新人をも一般に紹介せんとするのが文藝雑誌の使命である。

右にあるように、同誌は「純文学復興の氣運旺くなる折柄」注目され始めた新進作家に発表の機会を与え、かつ一般読者から投稿を募り、「隠れたる新人」を発掘する企図により発刊された。次代を担う文学の發信地たらんとする氣概が感じられる。その言葉通り、日次には、主に同人雑誌で活躍していた作家が多く名を連ねた。五号は、田畠修一郎、葉山嘉樹、中原中也、寺崎浩、佐藤惣之助、伊藤整、眞島武といった新進氣鋭の作家、詩人、評論家等三十名が顔を揃えた特集号「新撰出人集」となっている。先の「第一創作集」執筆陣五名の内、尾崎以外の四名については、一号から四号誌上に出版順に「(作者名)を語る」と題された特集が編まれた。また、文章文学の投書雑誌といふものは殆どなくなつて、加能作次郎、投書家の為に、創刊号(当時にあつて、同誌は同人雑誌を持つことが叶わない作家志望者に発表の機会を与える媒体でもあった。丹羽文雄、浅見淵、丸山薫、水原秋桜子、窪田空穂等が選者にあたり、月ごとに一般読者の投稿による創作、小品、詩、俳句、短歌から選ばれた入選作品が、「新人文芸」欄に掲載された。「投稿規定」によると毎月の入選者には創作五円、他一円の賞金を呈し、六ヶ月ごとに各欄入選者から選抜する一名乃至三名には、賞金総額百円を呈する文藝雑誌賞を授与するとある。受賞者には「以降優遇援助の方法を講ず」とも。しかし雑誌は五号「編輯後記」で「文藝雑誌の綱切も追々近付いて来た」、「投稿家諸氏の奮起を切望する」、「どういう新面目を持つて来月号は読者諸氏の前にまみえるか、期待を持つて頂きたい」と賞や次号への意気込みを見せながらこの号で事実上終刊した。

掲載された内容を見てみたい。創刊号から四号には唯一の連載小説である丹羽文雄「一色淑子」が掲載された。「第一創作集」執筆者以外の小特集としては、三号に「夭折作家研究」(中野重治「啄木研究について」、尾崎士郎「梶井君のことについて」、草野心平「宮澤賢治について」)、四号に「仏蘭西少年鬼才研

究」（春山行夫「クトオのデッサン」、田畠修一郎「ラディゲ私見」、神部孝「不思議な天才ランボウ」）が組まれた。文芸時評や海外の文学状況や翻訳も折に触れ掲載されている。他には加藤悦郎「漫画」が興味深い。原稿料が大暴落し、原稿は廻屋に売った方が多少値がよいことを発見した一流作家の妻が描かれた「稿料暴落」（「ありさうな風景——三六年度の文壇を予想して」、創刊号）、「迷子のゝ文芸復興ヤーイ」と呼ばれる一人の男が描かれた「迷子のゝ」（「春の文壇風景」、四号）等風刺に富んだ内容。

太宰は創刊号に隨筆「もの思ふ葦」を発表した。附記に「半ば以上、私の本の、広告のために書いた」とあるように『晩年』への並々ならぬ意欲が現された三篇より成る。その後の人生と奇妙に符合する内容なのが興味深い。創刊号に隨筆を載せる」とは「私、御誌へ三四枚のエッセイを私として、天に恥なきエッセイを、稿料なしで書くつもりであります。（創刊號へ。一）（一九三五年一月八日付、浅見淵宛書簡）とあるように、太宰たつての希望であった。その他四号に『晩年』収録の「陰火」が発表された。

太宰について書かれた文章は概ね好意的である。四号の小特集「太宰治を語る」には、佐藤春夫「尊重すべき困つた代物」、井伏鱒二「太宰君」、保田與重郎「佳人水上行」、檀一雄「おめざの要る男」が寄せられた。『晩年』の口絵を飾った太宰の写真はこの号の口絵の一枚として掲げられたもので、当時住んでいた船橋の町を散歩中に撮影された。この他、中村地平「同時代の友へ」（創刊号）には、新人を「前代の文学の残存的な意味合ひが特に強」い「廿歳過ぎた作家」と「次代に出現する新しい文学の前哨的な匂ひ」のする若い世代とに分け、後者の代表に太宰を挙げる一節がある。矢崎弾は「わが国の既成の、過去のリズムを少しでも認識の方向から反抗してゐると思はれるのは太宰治ひとりである」と「道化の華」を称える一文を「文芸時評 新人についての覚書」（二号）に記した。また五号では浅見淵が「文学と方言」で「中央標準語」に統一しようとしている「文部省の意向とは反対」に、「民族精神の喚起」によって「小説に方言を用ゐる事が流行しだした」この頃の作品である太宰「雀」に対し、「方言の持つてゐるリズムを巧みに利用して、郷里——ひいては、人生に対する激しいノスタルヂックな感情を滲みださしてゐる」と高評価を与えた。



加藤悦郎「漫画（春の文壇風景）」（「文藝雑誌」1936年4月号）